

メルマガ 「いいテク・ニュース」 季語に遊ぶ 2023年9月27日 (Vol.179)

『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』月暦図と俳句ーその3、10月・11月・12月

## 『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』月暦図と俳句

ーその3、10月・11月・12月



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Les\\_Tr%C3%AAs\\_Riches\\_Heures\\_du\\_duc\\_de\\_Berry\\_septembre.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Les_Tr%C3%AAs_Riches_Heures_du_duc_de_Berry_septembre.jpg)

### 9月『ぶどうの収穫』

『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』とはフランス王の弟で、中世を代表する芸術パトロン、ビブリオフィル（書籍愛好家）として知られたベリー公ジャン 1 世（1340-1416）がフランドル（現在のベルギー、フランス北部にまたがる地域）出身の画家ランブール兄弟（ポール、エルマン、ヨハン）に発注した世界で最も美しいとされる彩飾写本です。

1416年に奇（く）しくも、発注者と制作者 3 兄弟がともに死亡し、15 世紀末に別の画家が完成させました。

1 ページのサイズが 29 × 21 cm で、206 葉の最高級の羊皮紙（ようひし）と呼ばれる紙で構成され、見開きの左ページが「月暦図」で、右ページが暦です。

600 年前の 12 か月を月ごとの風景と人々の暮らしの様子が色鮮やかに描かれています。

今回は 3 回目で、10 月「種蒔き」、11 月「豚にどんぐりの実を食べさせる男」、12 月「猪狩り」の「月暦図」と俳句です。

お楽しみください。

※時祷書とは基督教の裕福な貴族や市民が日々の宗教的なおつとめをこなすための祈りのハンドブックのようなもの。

# 1. 10月「種蒔き」



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Les\\_Tr%C3%A8s\\_Riches\\_Heures\\_du\\_duc\\_de\\_Berry\\_octobre.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Les_Tr%C3%A8s_Riches_Heures_du_duc_de_Berry_octobre.jpg)

10月「種蒔き」

ここでは翌年に実を結ぶ麦の種蒔きが行われています。  
後方にそびえるのはルーブル宮殿です。  
ということは、ここはパリの中心地近くの農地。  
当時は大都市の近くにこのような畑が広がっていたことがうかがわれます。  
麦にはパンの原料となる小麦や、家畜の飼料にする大麦があります。  
麦蒔き時期は、種類やその地方の気候によって幅があり、本格的な寒さが訪れる前に終らせる農繁期最後の仕事です。  
画面中央の畑では、鳥のおどし用と思われる弓矢を構えた案山子（かがし）が見えます。  
しかし、画面左手前では、もう既に鳥たちが蒔かれたばかりの種をついばんでいます。  
天変地異や自然災害がなく、暦どおりに季節が巡り、予定どおりの農作業ができ、予定どおりの収穫があることが農民にとって一番願うことです。



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Jean-Fran%27ois\\_Millet\\_-\\_The\\_Sower\\_-\\_Google\\_Art\\_Project.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Jean-Fran%27ois_Millet_-_The_Sower_-_Google_Art_Project.jpg)

『種をまく人』ジャン＝フランソワ・ミレー（1814-1875）1850年

ジャン＝フランソワ・ミレー（1814-1875）の『種をまく人』は、力強く種を蒔く農民の姿を描き、労働の厳しさと崇高さを同時に表現し、ミレーの名を一躍有名にした出世作です。  
ミレーはこの作品に代表されるように、農民の生活を描いた名画を数多く描き、「農民画家」と呼ばれました。  
また、『種をまく人』は岩波書店のマークとしても有名です。  
創業者岩波茂雄は長野県諏訪の篤農家の出身で「労働は神聖である」との考えを強く持ち、晴耕雨読の田園生活を好み、イギリスの詩人ウィリアム・ワーズワース（1770-1850）の「低く暮らし、高く思う」を社の精神にしたいとの理念から選んだそうです。

また、ファン・ゴッホ（1853-1890）もミレーの作品に触発されて『種をまく人』のタイトルの作品を多く描いています。

1886年6月の作品はまばゆいばかりの夕陽に強烈な存在感があり、黄、青、オレンジ、赤、緑、紫のさまざまな色彩が協調しています。



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Van\\_Gogh\\_-\\_S%C3%A4mann\\_bei\\_untergehender\\_Sonne.jpeg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Van_Gogh_-_S%C3%A4mann_bei_untergehender_Sonne.jpeg)  
『種をまく人』 ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ（1853-1890）（1888年）

ここでは初冬の季語「麦蒔（むぎまき）」を詠んだ句をあげました。

麦蒔きや百まで生きる貌（かお）ばかり

与謝蕪村

一人出て星仰ぎおり麦蒔く日

市村究一郎

## 2. 11月「豚にどんぐりの実を食べさせる男」



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Les Tr%C3%A8s\\_Riches\\_Heures\\_du\\_duc\\_de\\_Berry\\_novembre.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Les_Tr%C3%A8s_Riches_Heures_du_duc_de_Berry_novembre.jpg)

11月「豚にどんぐりの実を食べさせる男」

この絵では林の中のドングリの実に群がる豚と、棒を投げてドングリを落としている男、その横では様子を見守る番犬が描かれています。

初冬の11月、豚肉は冬を乗り切るための大切な食料でした。

豚の餌となるドングリは大量のデンプンを蓄え、哺乳類にとって重要な食料となります。

古くより中央ヨーロッパでは養豚林があり、絵に描かれている林は中央ヨーロッパで自生するヨーロッパブナの林と思われます。

有名なイベリコ豚の餌はイベリア半島に自生するコルクガシがその役割をになっています。

ヨーロッパブナは、平均して高さ25～30m、幹の直径1.5mです。

大きく生長するものでは、高さ50m、幹の直径3mにもなります。

樹齢は平均すると150～200年、樹によっては300年に達するものもあります。

樹齢30年以上になると大量に実（ドングリ）をつけます。



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Fagus\\_sylvatica\\_Purpurea.JPG4a.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Fagus_sylvatica_Purpurea.JPG4a.jpg)

ヨーロッパブナの紅葉

ここでは晩秋の季語「団栗（どんぐり）」を詠んだ句をあげておきます。

## 団栗を拾ひ山へは褒言葉

藤田湘子

ガツガツと食事を摂る人を指して「豚のように食べる」といわれることがありますが、野性ブタの体脂肪率は13%ほど、食用豚でも14-18%です。

また、散らかって汚い部屋を「豚小屋」と形容しますが、本当は清潔を好み、排泄をする場所は餌場や寝床から離れた決まった一ヶ所にします。

知能が高く鏡の存在を認知でき、「お手」も「お座り」も簡単に覚えます。

また、ポジティブな状況とネガティブな状況によって、発声が違います。

味覚と嗅覚は発達していて、高級食材で知られるトリュフを掘り起こすのにメスブタが使われていました。

おとぎ話の『三匹の子豚』はものを作るときは、手早く仕上げるよりも、時間や手間をかけた方が、いざという時に役に立つという教訓を示しています。



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Journeys\\_through\\_Bookland\\_-\\_a\\_new\\_and\\_original\\_plan\\_for\\_reading\\_applied\\_to\\_the\\_world%27s\\_best\\_literature\\_for\\_children\\_\(1922\)\\_%2814596542440%29.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Journeys_through_Bookland_-_a_new_and_original_plan_for_reading_applied_to_the_world%27s_best_literature_for_children_(1922)_%2814596542440%29.jpg)

「旅立つ三匹の子豚」

ここでは仲秋の季語「良夜（りょうや）」＋豚を詠んだ句を選びました。

## 豚の仔の重なり眠る良夜かな

後藤浩子

### 3. 12月「猪狩り」



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Les\\_Tr%C3%AAs\\_Riches\\_Heures\\_du\\_duc\\_de\\_Berry\\_d%C3%A9cembre.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Les_Tr%C3%AAs_Riches_Heures_du_duc_de_Berry_d%C3%A9cembre.jpg)

12月「猪狩り」



この月の絵は森での猟犬による猪狩りの様子が描かれています。猟犬たちは興奮状態で仕留めた猪に噛みついてなかなか放そうとしません。赤い服の男はそれを引き離そうと必死です。右側の男は角笛を吹いて獲物を仕留めたことを仲間知らせています。ヨーロッパにおける狩猟による獲物は貴重な食料源で、当初、狩猟はすべての階級の人々で行われていました。しかし、中世盛期（11、12、13世紀）になると貴族階級の余暇を象徴するものとなっていきました。そして、それは休暇以上に社交や戦争の訓練、特権や高貴さを競う場としての役割を担うようになりました。



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:F\\_Desportes\\_Hallali\\_de\\_sanglier.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:F_Desportes_Hallali_de_sanglier.jpg)

1719～1725年ころにアレクサンドル＝フランソワ・デポルト（1661-1743）が描いた「猪狩り」の絵

猪は古くから狩猟の対象とされてきた動物の一つですが、本来、非常に神経質で警戒心の強い動物です。普段より見慣れないものなどを見かけると、それをできるだけ避けようとする習性があり、人間と遭遇した場合でも何もしなければ逃げ出します。

しかし、興奮状態だったり挑発を受けると反撃に出ます。

ダニ等の外部寄生虫を落としたり体温を調節したりするために、よく泥浴・水浴を行います。

猪が泥浴を行う場所は「沼田場（ヌタバ）」と呼ばれ、猪が横になり転がりながら全身に泥を塗る様子から、苦しみあがくという意味の「ぬたうちまわる（のたうちまわる）」という言葉が生まれました。

冬眠のない猪は二月が発情期で、昼間の行動は少なく大きな樹の下などで雌雄一緒に寝ます。

しかし、山間地の農業林を荒らしたり、農作物にも多大な害を与えたりするので、冬季には各地で猪狩りが行われます。

猪狩りは三、四人から十人ほどの仲間で行い、鉄砲上手ほど良い待ち場を受け持ちます。

猪の通り道は決まっており、犬に追われて逃げてくるのを待ち伏せて撃ちます。

ここでは三冬の季語「猪狩（ししがり）」を詠んだ句を選びました。

## 猪狩の衆を恃（たの）みて押通る

細川加賀



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100\\_views\\_edo\\_114.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_114.jpg)

二代目歌川広重(1826-1869)が描いたとされる「山くじら」の看板の絵『名所江戸百景 百十五. びくにはし雪中』

猪肉の鍋料理に牡丹鍋があります。

猪の肉を牡丹というのは、唐獅子（からじし）牡丹のシシと、肉の意味のシシをかけた隠語で、色も牡丹に似て赤です。

また獣肉が嫌われた時代には山鯨という隠語でもよばれました。

猪肉をそぎ身にして葱、豆腐、白滝などといっしょに味噌で煮込みます。

丹波篠山（たんばささやま、兵庫県）・郡上（ぐじょう、岐阜県）・天城（あまぎ、静岡県）などの名物です。

諺（ことわざ）に「しし食った報い」というのがあり、禁を犯して一時的に良い思いをしても、後で必ずそれ相応の悪い報いを受けるという意味です。

猪肉をよく食べる丹波篠山では、本当は「しし食うて温（ぬく）い」で猪を食べると精力が付き、体が温まるという意味ですが、他人様には食べさせたくないの「しし食った報い」という説があります。

ここでも三冬の季語「牡丹鍋」を詠んだ句を選びました。

## ぼたん鍋食べし渴きか雪を食ふ

橋本美代子

10月「種蒔き」の絵から小麦、大麦、ライ麦から作るパンを連想して私も詠んでみました。

## 焼麵包（トースト）はほどよく焦がし秋の朝

白井芳雄

種を蒔き、除草し、害虫から守り、豊かに実った麦。

それを収穫して、挽（ひ）いて、こねて焼く。

そうして出来たパン。

このパンづくりを、人類は遥か5000年以上前から繰り返してきました。

古来、「パン（bread）」は食べものそのものを意味する特別な存在です。

パン屋、あるいはパン職人という職業が生まれるはるか以前に、家族のために無償でパンを焼いていた人びとの長い過程があります。

ミレーは『種をまく人』と同様に『パンを焼く農婦』を大地と深く結びついた大きく堂々たる人物として描いています。



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Jean-Fran%C3%A7ois\\_Millet\\_\(II\)\\_005.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Jean-Fran%C3%A7ois_Millet_(II)_005.jpg)

『パンを焼く農婦』ジャン＝フランソワ・ミレー（1814-1875）1853-54年頃、クレラー・ミュラー美術館

今回は『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』月暦図と俳句ーその3として10月・11月・12月をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：エルンスト・Hゴンブリッチ著

(翻訳 天野衛、大西広、奥野臯、桐山宣雄、長谷川摂子、  
長谷川宏、林道郎、宮腰直人)

『美術の物語』(河出書房新社)(2022年)  
ISBN978-4-309-25628-3

高橋明也責任編集

『ART GALLERY テーマで見る世界の名画  
7 風俗画 日常へのまなざし』(集英社)(2018年)  
ISBN978-4-08-157077-5 C0371

宮下志朗著

『カラー版 書物史への扉』(岩波書店)(2016年)  
ISBN978-4-00-061134-3

千足伸行著

『隠れ名画の散歩道』(論創社)(2013年)  
ISBN978-4-8460-1239-7

舟田詠子著

『パンの文化史』(講談社)(2022年)  
ISBN978-4-06-292211-1 C0139

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修

『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』(講談社)(2008年)  
ISBN978-4-06-128972-7

茨木和生・宇多喜代子・片山由美子・高野ムツオ・長谷川權・堀切実編集委員

『新版 角川俳句大歳時記 春』(KADOKAWA)(2022年)  
ISBN978-4-04-400504-7 C0392

茨木和生・宇多喜代子・片山由美子・高野ムツオ・長谷川權・堀切実編集委員

『新版 角川俳句大歳時記 夏』(KADOKAWA)(2022年)  
ISBN978-4-04-400499-6 C0392

茨木和生・宇多喜代子・片山由美子・高野ムツオ・長谷川權・堀切実編集委員

『新版 角川俳句大歳時記 秋』(KADOKAWA)(2022年)  
ISBN978-4-04-400500-9 C0392

茨木和生・宇多喜代子・片山由美子・高野ムツオ・長谷川權・堀切実編集委員

『新版 角川俳句大歳時記 冬』(KADOKAWA)(2022年)  
ISBN978-4-04-400502-3 C0392

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア(Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、  
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒530-0038 大阪市北区紅梅町2-18 南森町共同ビル 3F

TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com